

● 玉川上水を歩く歴史散策 広報部会レポート

昨今、コロナ禍に伴い、あきしま街づくり市民会議の各部会は、満足な活動ができず、活動紹介が減少傾向により、まどあかりの発行も年に3回ぐらいのペースで発行しています。そこで広報部会では、各部会の活動報告に加えて、独自の調査や歴史資料を基に、昭島にまつわるトピックスも「まどあかり」で紹介していきますので、どうぞご期待下さい。

先ず昭島市がなにより自慢していることは、水と緑の町です。

東京都では、昭島市だけが唯一、地下水100%を水源として、水道水が市民に提供されています。

そして緑豊かな町であることです。市内北側にはフォレストイン昭和館・代官山緑地から続く整備された雑木林があり、南側には多摩川が流れ、段丘に面して続く玉川上水羽村の堰から始まる上水に囲まれた自然風景が、都心まで続いています。

このような豊かな自然を秋の到来とともに、歴史の勉強をしながら、散策しましょう。



▲へいわ橋 令和4年10月23日撮影

玉川上水は、徳川家康が幕府を開いて 50年後の承応2年、西暦1653年につくられた



▲どんぐり橋から熊川方面に向かう遊歩道

当時、江戸では湧水や溜池、周囲の小さな河川の水を使っていましたが、人が増え町が広がるにつれて、それだけでは足りなくなってきたのです。そこで、水量の豊かな多摩川から水を引くことになったのです。武蔵野台地に堀を掘って人工の川をつくり、江戸まで水を流すわけです。

地形をよく考え、谷などを横切ることなく江戸まで水を引いて来ることのできるルートが定められました。

取水地点の羽村から四谷大木戸（現在の新宿区四谷）までの約43キロメートル堀で、さらに先の江戸城と江戸の町へ石や木でつくった水道管が地面に埋められて配水されたのです。

堀の工事はおよそ8ヶ月という短期間で完成されたという説と1年以上の工事が続いたという説があります。いずれにしても今の時代で考えても信じられない早さです。

そのために、玉川上水沿いの村々はもとより、遠く檜原村からも人が集められたといわれています。

徳川幕府は御用書なるものを各地域に配布し、飲料水の供給のため、威信をかけた前代未聞の大プロジェクトでした。